

木暮え告@コく、)カゝナ

久保田琉奈

もっとたのしく生きていくにはどうしたらいいのか、ということについて私はよく考えるのですが、東京芸術祭ファームに参加して構造について考えることが楽しく生きるために重要なことだと感じました。このレポートでは構造と社会についての私の捉え方を説明した上で、東京芸術祭ファームにはどのような構造があったのか、私自身が今後どのように構造と付き合っていくのかについて書きました。

ちなみに、タイトルはギャル文字で構造のつくりかたと書いています。ギャル文字とは、記号などを組み合わせて文字に見立てる表現です。東京芸術祭ファームの活動を分解して考えているこのレポートの作りがギャル文字の作りに似ていると思いギャル文字を用いました。

私の構造の捉え方

私は構造について、骨組みや土台のイメージを持っています。

社会人類学者・民族学者のクロード・レヴィ＝ストロースは構造とは人々が無意識に持っている規則や常識のことで、構造が現象を作ると言っています。

私の社会の捉え方

社会とは異なる価値観が多数集まって形成される集団であると考えています。全く同じ価値観を持つ人間はいないので人間が二人いれば社会が存在し、誰も矛盾する考えを抱えているので人間が一人いるだけでも社会が存在していると捉えています。

構造と社会の関係

「構造」と「社会」は、「人々が無意識に持っている規則や常識」と「人間が一人以上いれば存在する、異なる価値観が多数集まって形成される集団」であり、構造が社会を作り出し、社会も構造を作り出すと考えています。人は行動するとき自分の中にある規則や常識に則って行動を決めています。その規則や常識は、これまで経験してきた社会がどのようなものだったかに強く影響されているはずです。社会は、その社会に属する人々が無意識に持っている規則や常識を基に成り立っています。

このように考えると、これからも社会のなかで生きていく私たちが心地よく暮らすためには規則や常識のあり方を考え整備する必要があると言えるのではないのでしょうか。

東京芸術祭ファームはどのように構造を作り出していたのか

東京芸術祭ファームではガイドラインとレクチャーで、セーフスペースのための規則や常識を作り出していました。ガイドラインでは、東京芸術祭ファームは参加者全員で創作を行い誰でも意見が言える場であることを明記し稽古場での権力の偏りを失くそうとしていました。レクチャーでは、いろんなバックグラウンドを持つ人々とコミュニケーションをとる際に留意しておくべきこと、権力はどのように出来上がるのか、ジェンダーと性的指向の多様さなどの説明を受けました。これらのガイドラインとレクチャーによって、参加者は東京芸術祭ファームで心がけるべきことの共通意識を持ちました。それにより、稽古場では他人とのコミュニケーションの摩擦が減り、人間関係のストレスが極端に少なくなりました。

私はいい稽古場からいい劇が作られると思っているのですが、東京芸術祭ファームの稽古場ではスタッフもパフォーマーも演出家も権力の偏りを感じさせることなく同じ立場で対話していました。稽古場の雰囲気は本番にも波及していきました。役者は稽古場でも舞台でも自分の意見や気持ちをありのまま出しやすくなり、『「クィア」で「アジア人」であることとは？』では当事者性の強い作品が完成したと感じています。

構造整備の考え方を創作に取り入れる

東京芸術祭ファームを経験して以降、集団創作を行う際には参加している人達がそれぞれ心地よく過ごすことのできるセーフスペースのための構造を整備したいと思うようになりました。

わたしがこれまで経験してきた創作現場の一つに、人々が無意識に持っている規則や常識がおかしいものがありました。そこではただ多く発言する人が権力を持ち、その人の意見ばかり採用されていました。その人の意見は私にとってはいいものには思えませんでした、採用され続けました。表面的な意見が採用されていき、このままではいい作品は出来上がらないだろうと悲しんだ記憶があります。その現場では私が発言しても「いつも発言している人の指示に従おうね」と言われ私の発言は受け入れられず稽古場の調子は変わらないまま舞台本番を迎えました。その稽古場では権力が発言の多い人に偏り、さらに他の人の発言の機会が奪われていました。このような事を未然に防ぐために創作の初期段階でセーフスペースのための構造の整備を行い、それでも問題と対面してしまったときには構造の原因がどこにあるのかを考えるべきだと思います。問題の構造の核の部分を見つけ改善しなければ、問題は表層だけをかえて何度も発生してしまうでしょう。

一人の人間が変わるのには時間がかかるので、全体の構造が変わるのにも時間がかかると思います。構造を変えようとするときには、人が順応していける速度で地道に変えていくべきだと思います。

おわりに

東京芸術祭ファームでの体験によって、演劇は創作環境を整えることにも力を注ぐべきだと感じました。これから創作現場での実践において、構造と社会についての考えが有効なの

かを様々な方法で試していきたいです。創作現場から楽しく過ごせる演劇の現場について、構造の作り方という視点から考え続けていきたいと思います。



久保田琉奈（くぼたるな）

一東京、岩手（日本）

2002年生まれ。岩手県盛岡市出身。多摩美術大学美術学部にて在籍中。デザイン、演劇、障害者福祉を勉強中。劇団IMにて2年間所属し、身体表現に触れる。

2016年、劇団IM『詩劇 まな子と瞳』（出演）、2019年、高校演劇アワード2019 優秀演技賞受賞（出演/演出）、2020年、ロケットパンチ連合『春のロケパンまつり！』（出演/制作/企画）。